

第三節 教育・文化・観光

1 教育の動向

小学校の増設と整備 年号が昭和と改まり、昭和三年（五三）秋、新天皇の即位の式典が行われた。これにともない、政府は天皇・皇后の御真影を各学校に下賜し、奈良県では十月、県庁でその伝達式を行った。

このころ、うちつづく経済界の不況で、全国的に児童の就学率が低下してきたため、政府は、昭和三年十月、「学齡児童就学奨励規程」を定めた。その効果があがらないまま、翌四年秋にはじまった世界恐慌にまきこまれて国民生活が窮乏、各地で欠食児童がふえたので、七年九月には「小学校児童給食ニ関スル」通達を出し、欠食児童に給食を行う措置をとった。帯解小学校などで給食を始めたことが知られる。

このころ、児童の健康に対する関心が高まってきたようである。奈良県では三年一月「学齡児童ノ就学前ニオケル身体検査規定」を定め、四月から入学予定の児童に対し、毎年一月から二月のあいだに身体検査をするよう命じているし、その年八月、奈良市では、「市立小学校歯科医療規定」を定め、各小学校に対し、むし歯の予防と治療を励行させるようにしている。

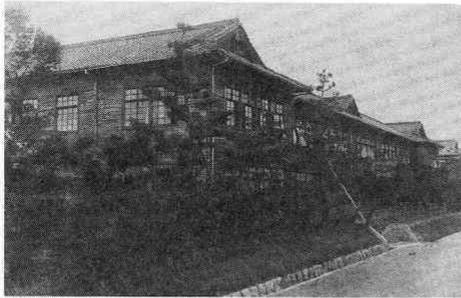
日本経済が好転する昭和八年ごろから、第六尋常高等小学校（現大宮小学校）の新設と第四小学校講堂の新宮の計画が浮上してきた。たまたま翌九年九月二十一日、近畿地方を襲った大暴風雨のため（第一室戸台風）、第二小学校（現飛鳥小学校）の講堂が倒壊、同校校舎平家建一棟と、第三小学校（現敷板小学校）本館二階建一棟が大破するなどの被害をうけたので、その

復旧を急がねばならなかった。第二小学校の再建と第四小学校の新宮は、翌十年九月に竣工した。両講堂とも鉄筋コンクリート平家建、奈良にふさわしい寺院風の外観をとって注目を集めた。また、この十年度には、増加する児童を収容するため、旧市立小学校の全校について、それぞれ一棟ずつ教室を増築した。

こうしたことがあって、第六小学校の新設は見送られたが、これには、その位置の選定や通学区域の変更が難航したこともあった。ようやく昭和十三年（一九三〇）三月の市会で奈良市油阪町惣川二二三番地の一（現大室町四丁）に新設することが可決となり、十月には県の認可もおりた。直ちに着工、第四・第五の両小学校から、新しく校区になった地域の児童を迎え入れ、児童数二九七人各学年一学級の六学級編成で出発したのである。十六年四月から高等科をおき、第六尋常高等小学校となるが、このときすでに総児童数七四四人、尋常科一五、高等科二の計一七学級にふくれあがっている。

第六小学校が開校した昭和十四年（一九三九）四月、東市村白毫寺が奈良市に編入されたので、東市小学校白毫寺分校は廃止となり、白毫寺地区の児童は第二小学校（現飛鳥小学校）へ通うことになった。ついで翌十五年十一月、都跡村が奈良市へ合併になったのにもない、村立都跡尋常高等小学校は奈良市に移管されて、奈良市立都跡尋常高等小学校となった。

周辺農村部の動きをみると、学校問題で紛糾していた柳生村では昭和二年（一九一七）、柳生小学校に高等科をおいて柳生第一尋常高等小学校と改め（翌年シジ）（ヤチに移転） 邑地小学校を柳生第二尋常小学校と改称して邑地前河原に移し、丹生小学校をその分校とすることで、ようやく学校問題の結着をみた。伏見村では、昭和六年に伏見尋常高等小学校の講堂その他を新築、明治村でも翌七年に明治尋常高等小学校の校舎を全面改築した。また、富雄村では、昭和八年二名尋常小学校を現在地に移して富雄北尋常高等小学校とし、翌九年富雄尋常高等小学校を富雄南尋常高等小学



昭和初期の第四（済美）小学校

校に改称、両校の通学区域に変更を加えている。

なお、私立奈良盲学校は、昭和六年（一九三二）四月、県へ移管されるとともに、聾啞部をおき、奈良県立盲啞学校となった。はじめ県立図書館の一部を借りて校舎にあてたが、翌七年四月油阪町四丁目の新築校舎に移転した。当校には、十二年五月にヘレンケラーが来校している。

教育活動
の諸相

第一次世界大戦後から昭和のはじめにかけて、鈴木三重吉の「赤い鳥」や、巖谷小波などが結成した日本童話連盟の児童文学運動の影響をうけて、市内の各小学校でも綴方教育への取組みやお

加話会・学芸会の開催がさかんになった。第二小学校（現飛鳥小学校）の訓導山田熊夫の童話がラジオで放送され、同校児童も児童劇を放送、帯解小学校の児童が唱歌を放送をしたこともあった。また、昭和二年（一九二七）五月には、アメリカから日本の小学校に人形が贈られてきて、県下の小学校でも人形を迎える会を開いたところがあった。

大正期にひきつづいて、教員の学習指導の研究がさかんで、昭和四年には第二小学校で、奈良県主催の初等教育研究会が開催されたが、その出席者は約三〇〇人を数えたという（同校「沿革誌」）。翌年十月には第三小学校（現鞍馬小学校）で開催され、参会者二三〇人、このとき同校で作成した冊子「地理科教育研究録」「郷土調査」が配布され、その後も毎年のように学級経営研究会・各教科研究会、最近教育思潮研究会などが開かれ、大正自由教育推進者の一人である女高師附属小学校主事木下竹次をはじめ、同校訓導清水甚吾・北井柳太郎・河野伊三郎らが講師または指導者として招かれている。

市立小学校の年間行事を「済美小学校沿革誌」についてみると、昭和十年（一九三三）の場合、つぎのようになっていた。

- 四月 半日遠足 第二期種痘 映画鑑賞会
 - 五月 修学旅行遠足 春季運動会 体力テスト
 - 六月 第二小学校で体操科研究会 半日遠足 奈良市球技大会（第五小にて） 研究会
 - 七月 木津川水泳（二日―三日） 林間学校（二日―五日） ラジオ体操会
 - 九月 学童競技大会（春日野グラウンド）
 - 一〇月 研究会
 - 一一月 展覧会 秋季遠足 秋季運動会
 - 一二月 三笠宮来寧奉祝
 - 二月 映画会
 - 三月 中島海軍中佐の講演 遠足
- また、校外学習の一つ、修学旅行は毎年四月、五月に実施しているが、昭和十二年（一九三七）度の市内各小学校の行先は表28のとおりである。

なお、東市尋常高等小学校では、大正十五年（一九二六）から五年生以上の児童の木津川水泳訓練を始め、昭和二年

表28 市内小学校修学旅行行先

	第一校 (樺井小)	第二校 (飛鳥小)	第三校 (鼓阪小)	第四校 (済美小)	第五校 (佐保小)
尋 一	菖蒲池	生駒山	菖蒲池	菖蒲池	菖蒲池
" 二	生駒山	大 阪	生駒山	生駒山	生駒山
" 三	桃 山	宇治・桃山	畝 傍	大阪・堺	畝傍・初瀬
" 四	吉 野	吉 野	宇治・桃山	大阪・堺	宇治・桃山
" 五	大 津	京 都	京都・大津	京 都	京都・大津
" 六	伊 勢	吉 野	伊 勢	伊 勢	伊 勢
高一	名古屋	名古屋	四 国	天の橋立	天の橋立
高二	名古屋	名古屋	四 国	天の橋立	天の橋立

昭和12年6月5日付『奈良市公報』による。

に、学校と家庭の連絡をはかるため機関紙「教の泉」を発刊、帯解小学校では、昭和五年から職員の服装を洋服に決め、十年から四年以上の児童有志について木津川水泳訓練を始めている。

幼稚園の開設

明治三十二年（一九〇九）〇・八割だった五歳児の幼稚園就学率が、大正十四年には四・四割に上昇した。幼稚園令が公布されて独立の教育機関として認められるのは、大正十五年（一九二六）のことである（それまでは小学校令のなかに位置づけられていた。）

奈良市には、大正元年（一九一三）に設立された奈良女高師附属幼稚園があるだけだったが、十五年五月に私立愛染幼稚園が生まれ、昭和二年（一九二七）女子師範学校に附属昭徳幼稚園の設立をみるが、これは附属小学校後援会の手で設置されたものであった。ついで昭和四年に飛鳥幼稚園が、翌五年に親愛幼稚園が開設されるが、いずれも私立であった。飛鳥幼稚園が、市立になるのは昭和十二年四月のことである。

他方、第一次世界大戦後、大都市を中心に託児所の要求が高まってくるが、奈良では昭和三年川上町に市立託児所の設置をみている。昭和初年における奈良市の幼稚園と託児所は表29のとおりである。そのころの幼稚園の保育内容を奈良女子高等師範学校附属幼稚園（二年保育）についてみると、年長組の四月の保育要目はつぎのとおりで

表29 昭和5年の奈良市の幼稚園・託児所

園名	所在地	設立年月	設立者	園児数
奈良女高師附属幼稚園	東向北町	大正元年11月	文部省	231
女子師範附属昭徳幼稚園	北魚屋東町	昭和2年4月	附小後援会	60
私立愛染幼稚園	小太郎町	大正15年5月	児玉木蔵ほか2人	103
私立飛鳥幼稚園	地蔵町	昭和4年4月	杉本甚七	81
私立親愛幼稚園	東向南町	昭和5年4月	吉村大二郎	43
市立託児所	川上町	昭和3年2月	奈良市	75

あった。

- (1)自由遊 (2)矯正的運動 (3)郊外散歩(観・遊) (4)摘草(観・遊) (5)花たば(観・手) (6)花祭り(観・談) (7)桜(観・談・唱・手遊) (8)野に出て遊ばん(唱・遊) (9)春の動物(観・談・手・画) (10)花籠(手) (11)船(手) (12)天長節(唱・談) (13)絵画回覧(画) (14)誕生日祝(談・唱・観・手) (15)家遊び(観・談・手・唱・遊) (16)凧揚げ(観・遊・唱) (17)水兵(遊) (18)輪取り(遊) (19)自由描方(画) (20)花壇・菜園・動物舎の観察 (21)偶発事項 (22)衛生上の注意 (23)既習練習事項

注 遊は遊戯、唱は唱歌、観は観察、談は話、画は図画、手は手技の略

(文部省編「幼稚園教
育百年史」による)

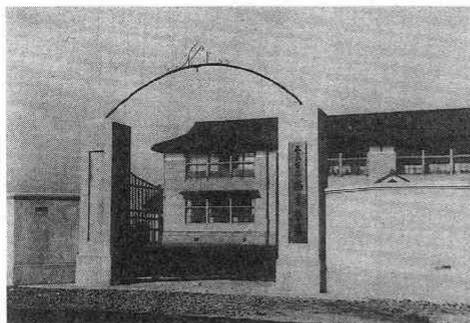
昭和八年(一九三三)の『奈良市勢要覧』によると、奈良市における幼稚園全体の組数は一六、同年度入園児三九〇人、保育満期者三三四人、退園児五九人、年度末園児数五〇三人となっている。

なお、幼稚園教員養成機関として、大正九年(一九二〇)に開設された奈良女子高等師範学校保姆養成科があったが、昭和十四年六月、戦争未亡人のために同じ女高師内に奈良特設幼稚園保姆養成所(修業年限一年・定員三〇人)が設置された(昭和十九年廃止)。

中等教育 中学校教育は、もともと高等普通教育とみなされ、完成教育として位置づけられていたが、上級の発展 学校への進学者が増加するにつれ、進学のための準備教育と考える傾向が強まった。そこで文部

省は、昭和六年(一九三一)一月、「中学校令施行規則」を改正し、中学校に第一種、第二種の二つの課程を設けた。

第一種課程は、卒業後すぐ実生活に入る者のための課程で、学科目のうち、理科・実業を重んじた。第二種課程は、上級学校へ進学する者のための課程で、数学、外国語を重視した。同時に「中学校教授要目」を定め、法制・経済にかえて公民科を設け、物理・化学・博物を理科とし、作業科をおくとともに体操科中に剣道、柔道をおいて、いずれかを必修させることにした。



正気書院商業学校

大正十三年（一九二四）に開校した県立奈良中学校は、昭和年代に入って発展期をむかえ、進学校としての教育内容を充実させていった。入学志願者が増えてきたため、昭和十二年（一九三七）から、それまでの一学年二学級、定員一〇〇人を、三学級一五〇人に改めた。

実業教育に対する要望が高まり、県立奈良商業学校への入学希望者も増加した。これに応えて同校では、昭和十一年（一九二六）に一学年定員を一五〇人に増やし、さらに十五年には二〇〇人に定員増、本科の総定員は一〇〇〇人を数えることになった。なお、同校では、昭和元年に実践科、十六年に補習科を併置したことがあった。

私立正気書院では、昭和二年一月、普通科を廃し、中等学部・漢文専攻学部・法学部（夜間）をおくことにしたが、同年四月には中等部を正気書院中等学校に改称した。また、翌三年四月には法学部を廃止して昭和法律学校をつくったが、一年で廃校となった。五年三月、財団法人正気書院（理事長 曾根 賢）を設立、正気書院中等学校を正気書院商業学校に改組した。同校は、高等小学校卒業を入学資格とする修業年限三年の甲種商業だったが、昭和八年四月、尋常小学校卒業を入学資格とする修業年限五年制に変更した。

夜間中学校として大正十四年（一九二五）に設立された南都正強中学は、昭和二年六月、伏見村大字西大寺に校舎を新営して本格的な教育活動に入ったが（入学者は、大正十四年四八八人、大正十五年四五一八人、昭和元年四八八人、昭和三年四六六人）昭和八年四月、財団法人南都正強中学校（理事長 内政治郎）として文部省の認可を受け専検指定校となった。また、大正十五年に東大寺勸進所の三室を使用、教職員一五人、入学生四五人で出発した金

鐘中等学校は、昭和三年三月、奈良市水門町に校舎を新築、移転した。昭和八年七月、財団法人金鐘学園を設立、夜間中学校として指定され、教科履修者は普通中学卒業生と同資格を与えられることになった。

昭和十六年（二五）二月、財団法人帝塚山学園（理事長山本藤助）が政府の認可をうけ、同年四月、帝塚山中学校が開校された。これは、大阪の帝塚山学院が創立二五周年記念事業として計画した総合学園設立の最初の事業として実現をみたものである（戦争のため計画は中斷を余儀なくされた）。帝塚山中学校の第一回入学生は一七一人、あやめ池遊園地内航空館を仮校舎としたが、翌十七年一月現在地に校舎を建設した。同年三月、関西急行電鉄（現近鉄）の学園前駅が開設され、生徒の登下校時だけ電車がとまるようになった。

昭和のはじめ奈良市には、女子の中等教育機関としては、官立の奈良女子高等師範学校の附属高等女学校と附属実科高等女学校および私立奈良育英高等女学校の三校があった。昭和三年二月、各種学校として育英高女に併置されていた奈良女子高等裁縫学校が、甲種程度の実業学校である奈良育英裁縫女学校（修業年限四年の本科のほか別科を置く）に改組されたので、三校から四校にふえた。

女高師の附属では、昭和十二年四月、附属高女を附属高女の第一部（修業年限五年）、附属実科高女を第二部（修業年限四年）と改めた。育英裁縫女学校は、十年二月に別科を廃止、専攻科一部を家庭科に、同二部を専攻科に改めたが、十六年二月の改組により、高等小学校二年修了を入学資格とする奈良育英高等実践女学校（修業年限二年、定員本科一五〇人、翌年から三〇〇人）となった。

昭和十年前後になると高等女学校への女子の進学校希望者が全国的に増大した。ところが奈良には公立の高等女学校がなく、女高師附属高女は他府県からの志願者も多くて狭き門となり、市内小学校の女子卒業者の進学難は年々深刻になったので、公立高等女学校をつくってほしいという声が高まった。これに対し奈良市会は、昭和十二年二月公立高等女学校建設建議案を採択したが、財政的裏付けが得られないまま見送られてしまった。しかし、受験競

争は激しくなるいっぽうであったので、十四年（一九二五）十一月、こんどは奈良県議会で植村県議が奈良市内に県立高女を設置する必要を力説、これをうけて県当局が十五年度予算に県立高女新設費五〇万円を計上した。ところが、起債をめぐって文部省と意見が対立、実現にいたらなかった。これをみて奈良市長滝清麻吉は市立高女の設立を決意、昭和十五年これを市会に提案して賛成を得た。その後いくつもの曲折を経て、十六年四月、入学定員一五〇人、五年制の奈良市立高等女学校の開設にこぎつけることができた。これによって高女への入学難が緩和され、多年にわたる市民の要望が満たされたわけで、市立高女では、翌年入学定員を二〇〇人にふやした。

青年学校 勤労青少年に対する教育機関として、昭和のはじめには、実業補習学校のほかに、大正十五年の発足（一九二六）に開設された青年訓練所があった。奈良市では、これに加えて昭和三年（一九二八）六月、第四・第五の両小学校内に、それぞれ第四・第五家政女学校を設け、女子の実業補習教育をすすめた。昭和五年には第一実業補習学校を市立奈良商業専修学校に改めたが、実業補習学校の生徒が年とともに減少、第二・第三・第四の各実業補習学校は、昭和七年三月、廃校のやむなきにいたった。

ところで実業補習学校と青年訓練所は、ともに同一年齢層の青少年を対象とするものだったので、制度上何かと支障の生ずることが多かった。このため両者の統合を望む声が高まり、昭和十年（一九三三）四月、青年学校令が公布されて、実業補習学校と青年訓練所を廃止し新たに青年学校が設られることになった。これにともない奈良市では、同年十一月、存続していた二つの実業補習学校と五つの青年訓練所に代えて奈良市立第一・第二・第三・第四・第五青年学校を各小学校に併設した。このうち、第四・第五の両校には女子部を設けたが、他は男子のみとした。青年学校の教授および訓練期間は、普通科は二年、本科は男子五年・女子三年が原則で、普通科には小学校尋常科卒業生、本科には普通科修了者または高等小学校卒業生を入学させた（（研究科や専修科もあつた））。教授および訓練科目は、普通

科では修身及公民科・普通学科・職業学科・体操科(女子には家事・裁縫が加わる)、本科では修身及公民科・普通学科・教練科

(女子には家事・裁縫が加わる)であつた。昭和十一年一月現在、市内五校の生徒数は、一三三一九人(男子一三三五人、女子九四四人)を数えている。

周辺の村々でも、農業補習学校や青年訓練所にかわつて青年学校がつけられたが、県の方針もあつて一町村一校に統一されていった。

師範学校と 不況の波は教育界にも及び、昭和五年(二六〇)前後には教員俸給の不払いや減俸を余儀なくされ
女 高 師 なる市町村が続出するし、完全就職のはずの師範学校でも未就職の卒業生が増加、奈良師範でも昭

和六年の未就職者二十九人を数えたという。昭和五年度以降、師範学校経費が削減されるいっぽう、給費生が減られ(昭和六年度募集人員のうち、男師では一三二八人中三八八人、三一人、その給付額も減額となつた。こうした事態に直面して奈良県が私費生、女師では五二八中二五人、一九人が私費生であつた)、でも、男女両師範とも昭和六年度の募集定員を減らし、男子師範では本科第一級の学級を一学級に削減することにした。当時奈良師範学校は、本科第一部一〇学級(五学年分)、第二部二学級(二学年)、専攻科一学級の計一四学級だったのだが、次年度以降もひきつづき削減の方針をとり、昭和十年には一部五学級、二部四学級(昭和六年修業年限が二年に増と二学級となり、昭和七年に改められたので翌七年、八

昭和六年一月、師範学校規程の改正にもない、本科第二部の修業年限を二年に延長し(女子師範では、昭和二年度から二か年になつていた)、授業科目も改正し、法制・経済にかわつて公民科を設けるとともに、教練や柔・剣道を体操科から独立させ、その教育を重視するようになった(昭和十一年から、女子師範にも弓道や薙刀)。このころから男女両師範とも訓育を強化し、国体観念の明徴に努めるようになるが、男子師範の場合、「皇祖発祥の地としての自覚」を強調するところがあつた。かねて訓育の一環として寄宿舎生に毎月一回春日神社参拝を課していたが、十年からこれを皇陵、神社参拝に拡大、十二年(二五三)九月には石上神宮参拝の夜行軍を行つたり、十三年二月には三社巡拝徒歩競走を実施したりしている。

第四章 経済不況と奈良

表30 官公立・私立各学校の学級・教員・生徒数

	昭和6年			昭和11年		
	学級数	教員数	生徒数	学級数	教員数	生徒数
奈良女子高等師範学校	18	51	473	16	48	407
“ 附属高等女学校	10	28	450	10	27	442
“ 附属実科高等女学校	5	17	215	本科4 補習科1	18	192 20
“ 附属幼稚園	7	8	236	7	9	234
第三臨時教員養成所	1	15	25			
県立奈良商業学校	10	22	262	11	26	532
“ 中学校	10	17	467	10	21	476
“ 師範学校	13	30	361	11	27	269
“ 女子師範学校	8	19	207	8	17	143
“ 附属昭徳幼稚園	2	6	73	2	2	63
県立盲啞学校	10	6	39	11	13	98
私立昭和法制学校	2	6	10			
“ 金鐘中等学校	4	23	126	4	14	156
“ 正気書院商業学校	3	9	81	5	13	148
“ 奈良育英高等女学校	6	17	180	7	23	345
“ 高等裁縫女学校	5	22	140	6	28	210
私立山口高等裁縫学校 (大正14年4月創立、高天市町)	2	2	18			
私立奈良裁縫専修学校 (昭和3年4月創立、雑司町)	6	11	47			
私立愛染幼稚園	3	7	119	3	5	81
“ 飛鳥幼稚園	2	7	82	2	6	86
“ 奈良専修女学校 (奈良裁縫専修学校の後身)				7	11	60
私立金鐘幼稚園				2	5	64
“ 親愛幼稚園				3	4	63

各年度の『市勢要覧』による。

奈良女子高等師範学校でも、左傾思想の学園への波及対策として、昭和三年（二五三）十月、文部省の指示にしたがって生徒主事をおき、八年からは生徒課を設置して、生徒に対する訓育・補導体制をいちだんと強化した。

なお、女高師の同窓会である佐保会では、佐保会館（会員の会合・宿泊施設として昭和三年開設）を校舎にあてて（女高師の裁縫室・制室等なども教室として借用）佐保女学院を開設した。高等女学校卒業以上の学力を有する者を入学資格者として、修行年限一年、和洋裁・手芸・調理・茶花道・書道などの教養を培うための学校で、初年度の入学生は二十八人であった。

軍事色の 昭和六年（二五三）九月、満州事変がおこって中国への侵略が始まると、「非常時」の声とともに学園波及 教育界も軍事色を強めていった。早くも十一月には、奈良中学校の生徒が満州派遣将兵の慰問袋をこしらえるため荷車をひいて学校農園の野菜の販売にしたがい、翌十二月五日には、男子師範前の広場で市内中等学校連台愛国大会が開かれ、閉会後全員で春日神社に参拝、国鉄奈良駅前まで行進している。翌七年になると、かねて四・五年生が陸軍の演習に参加するなど軍事教練に力を入れていた奈良中学校では、四月に機関銃を購入して軍事教練の徹底を期し（奈良新聞 四月八日刊）、五月には奈良商業学校で、卒業生の「満州国」進出を目的に中国語の講習を始めている（同前）。また軍用飛行機大和号や愛国中学生号建造のための献金を行うが、大和号については、小学生の献金も相ついだ。「奈良新聞」は「冷淡な一般県民に反して学童間に燃える愛国心」との見出しで、これを、報道している（六月三日）。小中学校を問わず、宮城遙拝、武運長久祈願のための神社参拝・軍事講話・連隊見学などの行事がふえていったのはいうまでもない。奈良中学校では、八年四月、歩兵三八連隊軍旗祭の分列式に参加（二年生以上、二年生は見学）、九月には師団司令部から軍用鳩八羽を借り受けて軍用鳩飼育訓練を始めており、翌九年七月の「近畿防空演習」には、市内の各学校ともこれに参加した。

郷土部隊の歓送迎のほか、皇族などの送迎にも、学校の児童・生徒が動員された。昭和十年（二五五）四月には、

満州国皇帝の来寧があり、同年十二月に三笠宮崇仁親王の来訪があったときには、市内小学校児童が若草山中腹に「奉祝」「奉迎」の提灯文字を描き出したりした。十二年六月には貞明皇太后の奈良女子高等師範学校への行啓があったが（大正五年四月、皇后と、このときにも各学校の児童・生徒が出迎えるとともに、四年生以下の児童四四〇〇余人としての来校もあった）、このときにも各学校の児童・生徒が出迎えるとともに、四年生以下の児童四四〇〇余人が若草山中腹に「奉迎」の提灯文字を浮かびあがらせている。

その前年、昭和十一年（一九二六）の状況を奈良中学校についてみると、六月に全校生徒による歩兵三八連隊宮庭の美化作業、六月から七月にかけて郷土部隊の送迎四回、七月に連隊の軍旗祭参列、十月十四日招魂社参拜、十月十二・十三・十四の三日間、五年生が県下男子中学校連合演習に参加、十一月に全体教練・査閲など、ほとんど毎月のように軍事と結びついた行事が行われている（同校校友会、誌第九号）。

昭和十二年七月、日中戦争が全面化すると、学園の軍事色はいちだんと強まり、戦時教育が推進されていくことになる。暑中休暇明けの九月三日、市立小学校校長会議は「時局を児童に認識せしむるため、充分な時局教育に努力する外、各学校では皇軍慰問箱を設け、小遣ひ金を節約し児童に献金を行わしめる等」「積極的戦時教育」を決議した（奈良新聞、九月四日）。同月、国民精神総動員運動が始まると、学校教育にもその影響が及んだ（五〇四）。戦捷祝賀行事にも動員されるようになった。同じ十月の二十八日に行われた上海戦線戦捷の祝賀には、「五千六百名の小学児童の旗行列」が行われ、翌二十九日の大提灯行列には、学校を代表して「奈商生三百・奈中百五十・師範三百・金鐘中百・正気書院商業百」「女子師範百・青年学校二百六十」が参加（師範学校前広場に集合、奈商プラスチックバンドを先頭に連隊に続き、万歳三唱の後再び市中を行進）、南京陥落戦捷祝賀の際にも、各学校から十二月十一日の宮民合同提灯行列に参加（午後五時、連隊連兵場に二万人が参集、奈商プラスチックバンドを先頭に市中を行進）、翌十二日には全市小学校児童が旗行列を行った（奈良新聞）。

文化運動

大正から昭和にかけて、多くの文人の訪れがあって、奈良は近代文学史上輝かしい一時期を迎えたが(第四章第2節)、地元でも文学青年たちによる文芸運動の台頭がみられた。すでに早く大正四、

五年(一九一五、一六)ごろ、『大和文学』『印度更紗』といった文芸同人誌があったが、大正八、九年ごろ『大和日報』の記者だった藤原徳次郎を中心に奈良文芸研究会が結成され、前から出ていた同人誌『未墾地』を引き継ぐとともに、音楽会や文芸詩歌講演会などを催した。のちに歌謡曲の作詞者として名をあげる佐伯孝夫や考古学者として活躍する榎本亀次郎(杜人)もこのメンバーであった。佐伯は、当時奈良郵便局長だった父とともに奈良に住んでいたのである。ついで十一年には、中川抱夢らが白い花の詩社を創立して文芸誌『白い花』を出し、十三年秋には、ハーモニカ・バンド、白い花ハーモニカ・ソサイエティを結成する。また、詩人の松村又一と歌人の米田雄郎が、十二年ごろ詩と歌の同人誌『雲』を出し、十三年の夏松村は、関西詩人協会をつくって詩誌『関西詩人』を創刊、事務所を漢国町の藤原宅においた。藤原は『大和日報』に文芸欄を創設してその編集を担当したが、その文芸欄は文学青年の発表の場として大きな役割りを果たしたという。十四年に藤原が大阪朝日奈良通信部へ移ったあと、その仕事を引き継いだのが北村信昭で、十五年三月新しき村奈良支部ができると(三七一、三七二)、猿沢池畔の自宅をその事務所にあてた。

新しき村奈良支部には『関西詩人』の同人たちをはじめ、「各階級に亘って目覚めた若い人達」が参加したが、『大阪朝日新聞』は「古い因習と煮え切らない姑息とで困っている奈良も、その衝動で目覚めつつ彼の人らが希望

する芸術の都となり得るであろう」と報じた（大和版、大正十一年三月二日付）。同支部は、武者小路が去ったあととも活動をつづけ、昭和三年（五〇）十月には、その主催で劇団「桃源座」が県公会堂で公演した。これが奈良で最初の新劇の公演であった。ついで七年七月「奈良小劇場」が市庁別館で第一回公演を行い、「商船テナシチイ」「白鳥の歌」を上演した。この「奈良小劇場」は、文芸誌「浅茅」の同人二、三人が中心になり、土地のアマチュアを集めて結成したものであった。

その『浅茅』は、北村のほか吉川清太郎・宮武正道ら一五人によって七年五月に創刊され、八年四月にかけて一〇冊発行されるが、詩・短歌・俳句・語学・民俗などの総合同人誌で、コスモポリタリズムのムードがただよい、若者たちの「よき道場」「楽しいホームグラウンド」でもあったという（『大和百年の歩み』文化編所）。

この「浅茅」の創刊に先立って、五年十月に奈良エスペラント会の結成があった。その中心になったのは、天理外国語学校馬来語部一年に在学中の宮武正道で、会員には北村・吉川らのちに『浅茅』の同人となる者のほか笹谷良造・森三郎ら加わっていた。パラオ島から天理教本部に留学中のアテム・エラケツ（パラオ島コロルの南部大酋）もその一員であった。機関誌『E・L・N・A・R・A』を発行したが、会の事務所のあった西御門町の宮武宅は、会員の溜り場となり、文化サロンの観を呈したという。七年六月、奈良女高師からも五人の学生がこの会に参加したが、長谷川テル・長戸恭の二人が八・三〇事件（昭和七年八月三十日に行われた治安維持法違反容疑による県下一斉検挙）にまきこまれて、「奈良小劇場」の幾人かとともに検挙された。これに衝撃を受けたうえ、宮武が病気になるたたりして奈良エスペラント会は急速に活力を失っていった（宮武タツエ編『宮武正道』追想）。

宮武は、このちマレー語の辞典や語学書のほか南洋諸島の民俗宗教・文学について多くの著作を遺したが、昭和十九年三二歳で世を去った。八・三〇事件で女高師を退学になった長谷川テルは、のち中国に渡って中国人と結

婚、日中戦争中電波を通じて反戦を呼びかける。

なお、昭和十年ごろナラ・アマチュア・タンゴ・バンドが結成され（バンドマスター）、奈良公園の納涼場で演奏したり、堺の大浜方面に出向いたりもしたが、軍国主義の高まるなか、程なく姿を消していった。

昭和初期のところで、昭和のはじめごろは、打ちつづく経済不況のため社会には暗く沈滞した気分がひろがった。大和文化研究

大和文化研究 ところで、昭和のはじめごろは、打ちつづく経済不況のため社会には暗く沈滞した気分がひろがった。大正デモクラシーの名残りがあって、自由主義・社会主義がなお勢いを失っていないが、満洲事変を契機にナショナリズムが高揚、社会主義はもとより自由主義への圧迫が強まり、国粹主義・国家主義が幅をきかすようになっていった。

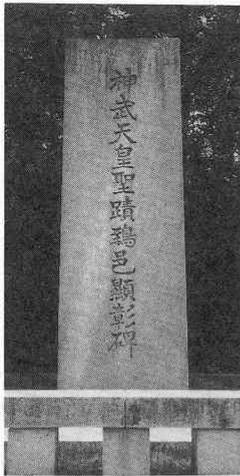
この時期奈良・大和では、こうした風潮をよそに遺跡の発掘調査がすすめられた。昭和二年（五三）の円照寺墓山一号墳の発掘をはじめとして（甲冑・刀剣・鏡などが出土）、一〇年ばかりの間に、吉野宮滝遺跡（昭和五年）・石舞台古墳（昭和八年）・藤原宮跡（昭和九年）・唐古遺跡（昭和十一年）・橿原遺跡（昭和十三年）・法隆寺若草伽藍（昭和十四年）などの発掘が相つぎ、大きな成果をあげた。考古学の分野ではまた、昭和七年に王寺町の郷土史家保井芳太郎の古瓦を中心とした『大和上代寺院志』の発刊があり（鏡のち「大和古瓦圖」）、十一年には石田茂作『飛鳥時代寺院跡の研究』があらわれ、この前後織田村（現櫻井市）出身の考古学者森本六爾も学術誌『考古学』を刊行するとともにすぐれた研究業績をあげた。昭和九年黒板勝美の主導によって奈良に日本古文化研究所が設立され、代表的な古墳の調査や藤原京跡の発掘に努めたが、若草山頂の鷲塚古墳の学術調査を行い、その結果これが埴輪円筒をめぐらす高地としては規模の大きい古式に属する古墳であることが明らかになった（昭和十年）。また、十三年には、末永雅雄を中心に橿原考古学研究所が設立され、大和各地の発掘調査に目ざましい成果をあげる。

考古学の分野に限らず、奈良・大和の歴史や文化についての研究もすすめられた。昭和二年には、県立図書館を

中心に奈良読書会が発足、夏目漱石門下の野村伝四が会長となって活発な活動を展開した。六年には、大和国史会ができ（会長は龍岡文、庫の版本歟）、九年十月から機関誌『大和志』を発行（十九年六月まで通、第一七号で終刊）、「奈良曝」「奈良井上町年代記抄」「奈良坊目拙解」などの史料も順次連載して地域史研究に大きな役割を果たした。九年にはまた、大和国史会幹事だった高田十郎を会長に奈良郷土会が発足、月一回の例会を開き、主に近世以降の奈良について研究をすすめた。読書会と郷土会のメンバーはかなり重複していたが、会員たちの研究成果は昭和十七年『奈良叢記』にまとめられ、翌十八年には高田十郎の『奈良百題』も出る。

昭和十二年二月『奈良市史』（全一巻、五六〇頁）が公刊された。同年一月付の石原善三郎市長の序文によれば、「一読満喫に足るべき簡要にして且統制ある奈良市史なきを遺憾」として、昭和六年に同市長森田宇三郎がその編纂を企図し、京都大学助教授中村直勝に委嘱してすすめてきたものである。奈良の地名考証に始まり、平城奠都以前から市制時代までの奈良の歴史を通覧叙述した優れた通史で、市民読本として寄与するところが大きかったといわれている。

聖蹟 頭 彰 他方、すでに早く昭和のはじめから、事あるごとに国体の擁護が叫ばれ、「皇祖発祥の地大和」運動と鶏 邑 「建国の聖地大和」が強調されるようになった。昭和三年（二五〇）九月、昭和天皇の即位礼を前



神武天皇聖蹟
鶏村頭彰碑

に百済奈良原知事が「国体観念鍛成の一大道場」として建国会館の建設を発表したのはその一例である。神武陵や橿原神宮のある建国の霊地が強調されるにつれ、記紀の神話を絶対化し、神話に登場する神武天皇にゆかりの地名をどこかの地に比定しようとする聖蹟頭彰運動が高まった。鳥見の靈時

（神武天皇が天地の神を祭ったところ）については、すでに明治二十三年（一八〇）

桜井で始まっていたが、昭和六年（二五三）にはこれを名乗り出た町村は九か所に及び（富雄村二名もその一つであった）、激しい本家争いをくりひろげるが、そのほか各地で神武天皇の聖蹟を顕彰しようとする動きが大きくなった。県の聖蹟調査では、伝説地を含めて五五か所の聖蹟が拾い出された。昭和十四年政府は、神武天皇聖蹟調査委員会を組織して全国の聖蹟を決定していく。奈良市域では、昭和十五年五月、生駒郡富雄村と北倭村（現生駒市）の付近が鶏邑に指定された。「ソノ地域ハ凡ソ北倭村及ビ富雄村ニ巨ル地方ト認メラレル」とされたのである。両村が合同で運動したからだとされるが、この鶏邑は、『日本書紀』の神武即位前紀戊午年十二月丙申条に、神武天皇が長髓彦の軍と戦った折、金色の霊鶏が飛来して皇弓の弭にとまり、長髓彦がその光に戦意を失って敗れたので、その「皇軍の鶏瑞」によって、もと長髓彦と称せられていた地が「鶏邑と號」けられることになり、「今鳥見と云うは是れ訛れるなり」とある。鶏邑伝承地の一つであった。富雄川の上流、両村の村境に「神武天皇聖蹟鶏村顕彰碑」が建てられ（生駒市上端にあたる所に現存）、大軌（現近鉄奈良線）の富雄駅は鶏邑駅と改称した（戦後まもなく富雄駅に戻る）。

この聖蹟顕彰運動は、紀元二千六百年奉祝事業の呼び水の役割を果たした。

3 観光事業の発展

観光行政 観光ということばは、ツーリズム tourism の訳語として明治のはじめから使われてはいたが、
の 展 開 それが広く使われるようになったのは、昭和四年（二五五）鉄道省に国際観光局が設置されてから
のことである。それまで物見遊山・名所見物、あるいは遊覧などといわれてきたことが、だんだん観光ということばに置きかえられていくのだが、『奈良新聞』などはこの後もしばしば、もっぱら遊覧の語を使っている。



『奈良名所案内』(昭和元年)

奈良市では、市制施行当時から、観光を市政の基本方針の一つに掲げ、大正四年(一九一五)の市産業奨励規程によれば、若草山焼・夜桜電灯・納涼会・角伐りなどの行事や春日神鹿会・春日藤保勝会などの団体に奨励金を交付したりしている。しかし、広大な奈良公園が県の管理下にあったこともあって、市の観光政策は貧しく、宣伝パンフレットや絵葉書の作成、土産物への助成、接客業者らに対する講習会の開催といったことが、その主なものであった。しかし、昭和を迎えるころから、新しい施策もみられるようになった。昭和元年(一九一六)『奈良名所案内』をつくって観光客の招致をはかり、三年には、土産物としての一刀彫改善のため斯界の権威石川確治を招いて講習会を開くとともに、奈良ホテルで奈良・京都・大津の三市連合の会合をもち、道路網の整備など、組織的な観光対策を検討している。他方、料理屋組合も、昭和四年「柳暗花明を追ふ紳士に真の奈良を紹介しては」と申し合わせ、民謡詩人酒井柳酔に作詞を依頼して「民謡奈良音頭」をつくっている(『奈良新聞』昭和四年五月一日付)。

昭和四年二月、市内北部の有志によって「佐保川畔に桜と楓を植え昔日の佐保川の面影残す」ために佐保川保勝会が結成され(第五小学校に事務所を置く)、翌五年三月、県・市・実業協会・大軌・奈良電を母胎に、年中行事の援助、古典芸術・古風俗の研究・郷土舞踊の創成、夜桜・納涼の電灯施設の整備、宣伝用フィルムの製作、印刷物の発行などを目的として遊覧施設後援会の設立をみている(市役所内に事務所を置く)。ついで六年八月には市内の「各種接客業団体其他本会に関係のあるもの」を会員として奈良市観光協会が発足、市長森田宇三郎が会長となり、市役所内にその事務所を置いた。会則によると「内外観光客を優遇幹旋し、市内各種接客業の刷新向上を図る」ことを以て目的

に、年中行事・名所旧蹟・神社仏閣の紹介宣伝、旅館料理飲食店其他の優遇幹旋、宿泊食事名産品乗物などの幹旋、休憩所案内所の設置などを行うとあり、同年末から「観光ニュース」の発行を始める。また、この年十月、国鉄と大軌（現近）の奈良駅に観光案内所を設けている（昭和十五年大軌は、県が西角に設けた休憩所を改_造して観光案内所とする）。

翌七年五月、県の補助もあって市役所内に奈良美術工芸研究所を新設、新納忠之助を所長に美術工芸に関する研究調査や木工・漆工品などの創作指導にあたることになった。しかし、早くも同年秋には、研究考案された作品が高級過ぎて一般向きせず、市産業界の進展の助けにならないとして工芸品奨励の授産場に改組しようとの議がおこっている（『奈良新聞』昭和七年十一月一日付。その後市は研究所の県への移管を要望、九年一月七。それが実現して県商工部陳列所に併置される）。

またこの年、奈良市は「歴史的背景と大自然の秀麗に恵まれ、幾多の名勝旧蹟をもって知られてゐる奈良は、遊覧都市として生きる道を講じなければならぬので、其の古都の華やかさを添ふる目的のもとに」（『奈良新聞』昭和七年九月廿六日付）、奈良小唄の歌詞を募集、全国から八八六点の応募があり、九月東京の飯塚貞夫の作が当選歌に決定した（選者は坪内士郎、『奈良』良市公報「四九二号」）。作曲を永井巴に依頼、翌八年一月にできあがった。そしてこの年、奈良は観光産業博覧会でにぎわった。

民謡奈良音頭（一部略）

奈良はナア 奈良は日永よ

芝生に鹿も

やんれ芝生に鹿も

うつらうつらと寝てあそぶ

（断）大仏さまなら誰とゆる

わたしはあの娘の膝に寝る

□

春はナア 春は早から

浅茅が原に

やんれ浅茅が原に

おいでおいでの梅だより

大仏さまなら誰とゆる

わたしはあの娘をつれてゆく

□

秋はナア 秋は三笠の

十五夜お月

やんれ十五夜お月

まるい山からまるく出る

大仏さまなら誰とゆる

わたしはあの娘と背戸へ出る

□

猿沢ナア 猿沢覗くは

十七八か

やんれ十七八か

麩でも投げて見な鯉も浮く

大仏さまなら誰と浮く

わたしはあの娘といつも浮く



第1会場正門と産業本館

観光産業 明治二十六年（一九一三）奈良博覧会社（第一章第一節）が営業を閉じて以降、奈良での博覧会といえ、博覧会 大正四年（一九一五）に県公会堂で催された新日本博物展览会ぐらいであった。大正三年以降、全国的に府県や新聞社主催の博覧会も多くなってくるのだが（山本光雄「日」本博覧会史）、そうした流れに立って、奈良市でも市制三十周年にあたる昭和三年（一九二八）で、御大典記念博覧会開催の企てがあった。三条池を埋めたてて博覧会場とし、その跡地に市庁舎を新営する計画だったのだが、市庁舎移転に反対する市民の声が強まり（第四章第一節）、その巻き添えで博覧会もお流れになった。

三年後の六年六月、奈良市は、市制三十五周年を迎える昭和八年に、記念博覧会を開催する計画を発表した。新聞が「お流れの運命か」と書きたてたように当初からその実現が危ぶまれ、計画は難航した。

翌七年八月には、博覧会の第一候補地春日野グラウンドの使用が県に断わられたりして、いったんは無期延期になったが、十一月にいたってようやく具体化の運びとなった。博覧会の名称を「市制三十五周年記念観光産業博覧会」とし、八年三月二十日から五〇日間にわたり、西笹鉾町の「旧監獄跡」（いまの天理教会の近辺）を第一会場、奈良公園入口の「県農会前空地」（いまの県立美術館の付近）を第二会場として開催することとなり、十五日には

博覧会協会の設立をみた（会長に森田市長が就任、常任幹事には、（会長に森田市長が就任、常任幹事には、同業組合や商店会の代表が名を連ねた）。市が主催することにはいろいろと困難な事情があったらしい。博覧会に否定的な市会議員もいて、博覧会への市の補助は一万円にとどまった。残された期間はわずか四月、準備を急がねばならなかった。実質上のプロモーターとなったのは、博覧会協会にただ一人の顧問として名を連ねた谷井友三郎であった。彼は各地の博覧会に出店するとともにソウルの朝鮮博覧会で奈良館をつくるなどの実績をもつ博覧会通であった。彼の地元からの強い要望があって、京終駅前にも第三会場を設けることになった。

三か所の会場に相ついで趣向をこらしたパビリオンが姿をあらわし、三月二十日無事開会の運びとなった。前日の『大阪朝日新聞』奈良版は、大きく「古都の春を飾って／文化の香り高く／愈よあす開く／古典を背景にし／我産業の現勢を誇示」の見出しをつけ、ほとんど一筆をさいて博覧会の内容と見どころを紹介、これを盛りたてている。メインの第一会場（約七〇〇）には、産業本館・国防館・機械館・台湾館・阿里山館・朝鮮館・満州館・演芸館・子供の国・海女館・発明館、第二会場には観光館のほか石川・奈良両県の特設館と野外劇館、第三会場には日支事変館と野外演劇場が設けられていた。すでに満州事変が始まって一年有余、時局を反映したパビリオンの多いの目をひく。博覧会の人気は高く、なかなかの盛況をみせていた。四月二十日ごろから雨がつづき、二十六日未明には吉城川が氾濫、川面に設けられた第一会場の売店が流失する被害を受けた。このため会期を一週間延長、五月二十一日をもって閉幕となった。会期中の入場者三五万三八〇七人、売店や商品の流失による損害が大きかったが、市の補助金も三〇〇〇円増額され、博覧会そのものは一応成功をおさめて終わることができた（木村博一・安彦勲著）。

観光施設 の充実

奈良公園は、大正十一年（一九二二）に国の名勝に指定された。県では、これに備えてその前年、これまで内務部教育課に属していた公園係を独立昇格させて公園課としていたが、名勝奈良公園の一〇〇年の大計として植林計画をたて、翌十二年にその実施計画を策定した。それは、公園林の経営を枯損木の収



名勝奈良公園碑

益にのみ頼るのでなく、積極的に伐採と植林を行うことを骨子とするもので、伐採で風致破壊にならないよう配慮しながら、花山・芳山の両地区で漸次実施に移されていった。公園課長だった坂田静夫は公園の改良に意を用い、昭和を迎えてナンキンハゼを公園に植える。大正十四年長崎から種子を持ちかえって育て、昭和四年（一九一五）ごろ新公園（春日野運動場入口の^{（児遊園地、後述）}）に数十本植えたのが好評で、九年三月には登大路の公園入口から博物館にいたる道路の南側に数十本を移植した。こうしてナンキンハゼの並木が、いち早く紅葉して奈良の秋を告げることになったのである。いっぽう公園内の諸施設の整備もすすめられた。明治四十三年（一九一〇）にできた春日野運動場の東側に池があったので、その地形を利用してここに庭球コートがつくられ、大正十四年四月に外人選手を招いて開場式をあげた。昭和天皇の即位を記念して運動場の西側に春日野プールがつくられた。この場所は民有地になっていて、旅館を建てる計画もあったが、県はこれを三万円で買収し、昭和三年（一九一八）から四年にかけて完成したのである。はじめ夏以外の季節には魚を飼って釣堀に利用しようとし、体育関係者を驚かせたという話もある。さらに県は、大軌食堂の土地だったプールの南側も買収して、遊具を備えて児童遊戯場とした。このプールと遊戯場の場所は御即位記念として奈良公園に編入され、俗に新公園と呼ばれた。

さきに述べたように、現在飛火野と呼んでいる春日野御料地は、奈良離宮の計画が沙汰止みとなったため大正十四年に春日大社に払い下げられた。そこで神鹿保護会は、これまでの鹿苑に代わる大鹿苑の新設を目論み、払い下げられた飛火野の北部に鉄筋コンクリート造りの鹿の収容所と角伐場を築造した。これも御大典記念事業として昭和三年から翌年にかけてつくら



万葉植物園

れたもので、今の鹿苑がそれである。そしてこれまでの鹿苑のあとには、春日大社が経費三万円で天平文化宣揚運動の一つとして万葉植物園をつくることになり、昭和五年八月から工事にかかって七年十月に開園のはこびとなった。また、若草山のケーブルカー敷設問題(四八〇参照)がおこった大正十二年ごろから芝生の保護に注意が向けられるようになり、大正十四年には下駄ばき登山を禁止、昭和六年には三笠山保勝会ができて、登山禁止期間を設けるともに入山料や下足料をとるようになった。

ここで、昭和三年(三六〇)に奈良宿屋料理業組合が出した『奈良案内読本』によって当時の観光地としての奈良の実情をみておくことにしよう。同書は手ごろな小冊子で、名所旧跡の簡単に要領をえた解説をはじめ、鉄道交通や巡覧道筋なども載せているが、それらは措いて観光事情だけ

摘記しておくことにする。市内の交通機関としては乗合大型自動車一〇余台、一円均一自動車二〇余台、高級自動車一〇余台、人力車一五〇余台などがあり、旅館料理店は合計一七〇〜一八〇軒、このうち純然たる旅館は一〇数軒、お茶屋といえる料亭は三〇余軒を数える。宿泊料は一円五〇銭から四円ぐらいだが、三円程度で泊まる人が多いとある。案内料は公園一巡り三時間で七〇銭、半日一円五〇銭、一日二円五〇銭。博物館入場料一〇銭、大仏殿と春日社内陣拝観料各一〇銭、三月堂・興福寺・西大寺・唐招提寺の宝物拝観料五〇銭である。麻布・筆墨などの特産土産品のほかに、手みやげ品として角細工・張子鹿・あられ酒・奈良

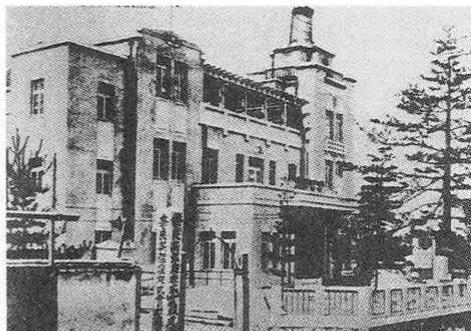
表31 宿泊客人員

年度	内国人	外国人
昭和3年	255,476	1,415
昭和4年	261,063	4,338
昭和5年	230,909	2,669
昭和6年	199,783	2,192
昭和7年	205,247	1,599

旧「奈良市史」による。



あやめ池遊園地（開園時）



新温泉

漬・大仏煎餅・絵はがきなどがあげられている。なおこのころの宿泊客数は表31のとおりである。

ところで、大軌の開通は奈良の観光化をうながすうえで大きな役割を果たしたが、その大軌の後援で、大正十一年登大路に娯楽場を備えた円型大浴場「新温泉」ができた（大阪の通天閣の東隣にあった「噴泉浴場」をま）。しかし、奈良の新しい観光施設を代表するものは、あやめ池遊園地であった。これは大軌の手によってつくられ、大正十五年六月に開園の運びになったものだが、その土地は大軌が路線敷の買収の折、地主からの強い要求があつて、泣く泣く抱き合せて買わされたところであつた。昭和三年（二五〇）から四年にかけて、温泉場・劇場・食堂などもつくられ、遊園地で遊んだあとは、温泉に入り食事をとって、一日を楽しく過ごすという趣向が人気を呼んだ。その後大軌は、

南園に住宅地を開発して十三年から分譲を始めるが、そのころ池をめぐって子どもたちの汽車・魔法の島・ウォーターシュート・小運動場などの娯楽施設を整え、子ども連れの遊園地として大軌のドル箱となった。戦局の進展にともない、十五年には「航空日本大展観」を開催、十八年には飛行塔を建てるなど、この遊園地も戦時色を強める。

このほか、昭和四年十月に横領町に競馬場ができ、折からの不

況にもかかわらず一万数千人のファンが押しかけたという。この競馬場は、昭和十四年に秋篠に移され、二十六年に廃止されて競輪場になる（二十五年は競馬場に併設している。）。

なお、地震や台風で奈良公園も被害を受けたことがあった。昭和二年三月の北丹後地震では、春日社の灯籠六〇基ばかりが倒れ、翌三年二月の大雪でも三〇数基が倒れた。昭和九年の第一室戸台風では、春日山を含む公園全域で八四〇〇本余りの樹木が被害を受け、飛火野や春日野の松・杉などの巨木も根こそぎ倒れ、五〇〜六〇基の灯籠も倒壊した。翌十年八月にも台風が来て天然記念物の大竹柏が倒れたほか四一基の灯籠も倒れ、十一年二月の地震でも、春日社・水室社・二月堂の灯籠五〇基余りが倒れたという（奈良市災害編年史。なお十九年十一月の、東南部地震でも石灯籠八七五基が倒れた。）。

開発と保存

一般に地域産業の発達や、観光事業の進展にともない、道路や観光施設が建設されようとするとき、環境の保全や文化遺産の保護のことが問題となる。とりわけ奈良の場合は、美しい自然と貴重な歴史的文化財を破壊から守ろうとする立場との対立は、避けられない問題として常に提起される。開発と保存の調和は、奈良にとって宿命的な課題であるといつてよい。奈良ではすでに早く大正のころから、観光にかかわってこうした問題がおこっている。

その最初のものは、若草山へのケーブルカー敷設案であろう。大正十一年（五三）にわかぐさ嫩草山登山電気鉄道株式会社ができ、手向山八幡社の裏山から若草山の裏を一重目頂上までケーブルカーを走らそうとしたのである。これに対し県は、十四年六月自然保護に支障がある旨鉄道大臣に進達、十二月に不許可となった。ついで同年、若草山にエスカレーターをつけようとして三笠山自動階段株式会社が設立された。その計画は、若草山北側の麓から「自動昇降階段」を敷設して一重目頂上の裏側に地下の終点駅を設けるというものであった。申請を受けた県ではこれに許可条件を示して好意的に対応したが、階段を引き上げる鎖の製作のことで行き詰まり、立消えになってしまった



春日奥山周遊自動車道路

という。

ついで春日奥山周遊道路の拡幅問題がおこった。この道路はさきに述べたように明治三十三年（一九〇〇）にすでに遊歩道として完成していたが、大正十三年ごろから坂田県公園課長らを中心に自動車道として拡幅改修する計画を立てられ、大軌に協力を要請したところ、昭和三年（一九二六）七月大軌から工事費二二万円の寄付があつて、十月末

に一応自動車道として竣成、翌四年五月から大軌による春日山周遊不定期遊覧自動車（九人乗り自動車三台）の営業が開始された。ところが同年九月、第二期の拡張整備工事が始められるにおよんで大問題となつた。すでに大正十三年に春日山原始林が天然記念物に指定され、地獄谷石窟仏と春日山石窟仏（穴仏）が史蹟に指定されていた。

十一月から十二月にかけて、三好学博士や内田圭助博士（両者とも文部省嘱託）の調査があり、学者たちから「拡張工事をやめて原状復旧工事にきりかえよ」という強硬な意見書が出され、文部省から県に対し「重要な現状変更と認められるから工事を中止し復旧せよ」との通達もあつて、自動車の通行制限ないし通行禁止の主張にまで発展した。森林美を破壊す

る、ルーミスジジミなど貴重な学術資料が失われるというのが、おもな反対理由であった。この間工事がつづけられて翌五年六月に完了、七月に県史蹟名勝天然記念物調査委員会の「大評定」が行われたが、春日山は果たして原始林かといった議論まで飛び出して結論を得るにいたらなかった。九月になって拡張整備工事を追認、「自動車通行はよろしい。春日奥山原始林はできるだけ現状を維持保存するため古典的気分を失うような施設はしない。入山自動車に一台一周五〇銭の料金を徴収する」ということで結着をみた。ついで七年には若草山頂まで道路が延長され、月日磐から花山を経て高畑に出ていた自動車のコースが、高畑から入る逆のコースに改められた。遊覧自動車の営業は、十三年に大軌から奈良自動車会社(奈良交通の前身)に移されたが、戦時体制の進展にともない、十五年十月に運行を中止する。

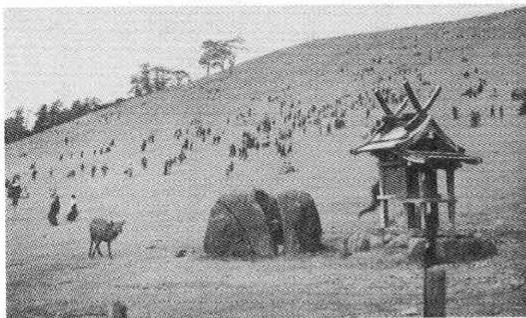
これとほぼ時を同じくして、国道の東大寺旧境内通過問題がおこった。昭和四年、内務省と県土木課が、国道一五号線(京街道、いまの国道二四号線)が狭いのでこれを東に移し、雲井坂下の一里塚のところから転害門の東を通り、川上町を横断して般若寺の東に抜ける新国道を建設する計画をたてたのである。計画によれば、新国道は東大寺境内を縦断することになる。東大寺は計画の変更を県に陳情、黒板勝美博士をはじめ学者らも抗議書を寄せて県の再考をうながした。これに対し、土木課は反駁の声明を出し、沿道の有志はこれに賛同、「国道期成同盟会」をつくって内務省に陳情したりしたが、同年七月百済知事が黒板博士と会談、東大寺旧境内が史蹟に指定されるならばということまで計画は中止となった。これが契機となって、七年に「東大寺旧境内」が史蹟に指定される。なお、道路の方は、佐保橋・奈良阪間は般若寺東方にはば計画通りに道路を新設、問題になった今在家・登大路間は在来道路が一二呎の幅員に拡張された。

道路建設をめぐる開発と保存の問題は、ほかにもあった。昭和十一年を迎え、都市計画道路ホテル線(春日神社一の馬居から奈良

ホテル前を地下、紀寺町で南大路と交差する「登大路」射家線」の拡築工事計画が具体化し、翌十二年秋に南大路から十輪院畑町までが完成するが、奈良ホテル敷地（大乗院跡地）の所有者である鉄道省が用地の割譲に難色を示すし、道路の旧大乗院庭園通過に反対する運動がおこって難航した。名園の遺構がつぶされるというので、日本庭園協会などが中心になって反対運動を展開したのである。昭和十四年を迎え、庭園遺構にからまないよう道路を迂回させることに計画が変更され、旧大乗院庭園は破壊をまぬがれた。鉄道省もこの年九月に用地の買収に応じ、ホテル線は翌十五年に完成する。なお、旧大乗院庭園は昭和三十三年名勝に指定される。

ほぼ同じころ、若草山西麓自動車道路開設問題がおこった。若草山麓の道路が混雑するので、その西方崖下に水谷川橋から手向山神社にいたる自動車専用道路を開設しようというもので、昭和十二年、その地の所有者である大阪の三笠山土地株式会社から願い出があり、自らその構想をもっていた県は、その年十二月会社の所有地約一万坪を公園地として使用することを条件に道路の新設を許可した。これに対し、その地は旧東大寺境内に接し、春日率川宮跡伝承地にも抵触し、史蹟を破壊するものだとして反対運動がおこった。翌十三年を迎え、県史蹟名勝天然記念物保存調査会委員の足立康博士は、「聖地奈良公園の危機と其保存」というパンフレットを出して反対を訴えた。奈良史蹟愛護連盟が結成されてこれを支持し、山麓の観光業者や人力車夫組合も反対にまわった。他方、奈良実業協会は道路の新設に賛成、二月二日観光団体の有志が協議して開発絶対賛成の談話を発表する。賛否両論が渦まく中、奈良在住の芸術家や有志は奈良風致愛護会を結成し（奈良帝室博物館長ら約五〇人余）、二月一日、道路は散歩道路の範囲にとどめ自動車の通行や俗化を招く施設を避けるよう県に陳情、波紋がひろがった。しかし、反対運動は実を結ばず、十一月に着工、翌十四年三月に自動車道路が完成する。

なお、昭和十二年に奈良地域の風致地区指定が行われている。八月七日に出された内務次官通牒「都市計画調査



若草山（昭和のはじめごろ）

資料及計画基準」によって、各府県で風致地区の指定が始められたが、奈良県ではこの年五月、その指定を行い、九月には風致地区規則を定めた。このとき奈良市域では、すでに明治三十五年（一九〇三）以来現状変更を認められなくなっていた奈良公園のほか、西ノ京・菖蒲池・山陵・都跡・佐保山・若草山の六地区が風致地区となったのである。

若草山の称呼

昭和十年（一九三五）の暮れのこと、俗に三笠山と呼ばれ、嫩草山わかぐさとも書かれたりしていたいまの若草山が、若草山の名に統一されることになった。これには、つぎのような経緯があった。

この年十二月三日、大正天皇の第四皇子（昭和天皇の末弟）澄宮崇仁親王（すみのりのみかど）が三笠宮家を創立したのだが、このとき湯浅宮内大臣が、三笠宮の名は万葉集に「高鞍の三笠の山」または「おほきみの御蓋山」と出ている春日山の西峰の称であるとの謹話を発表した。当時宮内大臣の謹話は、天皇に代わってのことばと受けとられていた。山焼きをする芝生の山（いまの若草山）を三笠山と称しては、聖旨にそむくことになる。驚いた県当局は、十二月三日、あわててつぎのような措置をとった。

三笠宮家御称号の典拠となった由緒深い大和三笠山（春日山の西峰）が近年北方にある芝生の嫩草山と混同され、この嫩草山も一般に三笠山と誤伝されているのは畏れ多いとなした奈良県当局では、三日竹田総務部長、坂田公園課長らが協議の結果、同県発行の名勝案内地図などに三笠山の名で記載されている嫩草山のことを自今本名通り一切嫩草山と訂正、奈良公園案内人、行商人らにも嫩草山と説明さすことに方針を決定、午後一時から県公会堂において県、市当局、奈良観光協会、三笠山保勝会、大軌、案内人、行商人両組合代表者らが会合、是正方につき協議した。これ

によって毎年数百万人の古都遊覧客に、緩やかな弧線と芝生で印象を残している三笠山はもとにかへって嫩草山の本名で呼ばれることになった。
（『大阪朝日新聞』昭和十年十二月四日付夕刊）

ついで翌四日には、「県報」を以てこれまで三笠山と若草山を混同視されてきたのは恐懼きょうくのいたり、「三笠宮の御称号宣賜の叡慮に」添い、「三重の芝山は若草山と呼び従来の誤伝を是正致し度し」と告示した（『奈良新聞』十二月五日付）。三笠山保勝会は、いち早く若草山保勝会と改称するし、県公園課では「毎年二月に執行する三笠山焼きも今後若草山焼きに改める」と表明、若草山麓の名産商店・旅館・休憩所等では、三笠山麓となっていた看板を自発的に若草山麓に書き改めたという（ただし、三笠山麓町の名はそのままで維持された）。さらに県では、当の三笠宮殿下が宮家創立の報告のため畝傍御陵に参拝した十二月八日夜、一戸知事が、三笠山の誤称は正の全国中継放送を行い、翌九日には各廳長・市町村長・学校長・官幣社宮司宛、「若草山ノ称呼是正ニ関スル件」につき訓令を発し、その周知方を依頼している。

こうして、人々に親しまれてきた三笠山の名は、一夜にして姿を消すことになった。宮殿下の名前のお山を足で踏んでは畏れ多い、といった空気があったのだという。軍国主義が高まり、皇室崇拜の精神主義が強調された時代風潮を反映する出来事だったといえよう。

注 御蓋山の名は、天平勝宝八年（嘉）の東大寺山塚四至図の注記にみえ、『万葉集』は三笠山と表記する。『古今集』の「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」の安倍仲磨呂の歌は、百人一首に収められて人口に膾炙かいしやしているが、内田穰吉博士は御蓋山から月が出ることは物理的にあり得ないから、この三笠山はいまの若草山にはかならないとい（『社会と人生の』所収「四、い、『万葉集』の三笠山には、御蓋山と若草山の二つがあったとし、若草山こそが三笠山だったと主張する（『社会と人生の』講義・三）。

いっぽう若草山の名は『夫木集』の中務卿親王の歌にみえるが、天文（三三）のころに生まれたものという（『奈良市史』（通史一））。

延宝九年（二六〇）の『大和名所記』には「三笠山 春日山に三笠山とてひきくだりてちいさき山に、春日の社おはします」「若草山 俗につづらおりの山といふ。三笠の山の北にならびてあり」とあり、その後の地誌類はおおむねこの説を踏襲している。嘉永二年（二六五）の「大和国細見図」には「三峰重ルヲ以テ今俗ニ三笠山ト称スルハ誤リナリ」とあって、俗世間では若草山の方を三笠山と呼ぶようになっていたことが知られ、元治元年（二六四）の「和州奈良之絵図」には三笠山と記している。

こうして明治以降、御蓋山をやさしく表記した三笠山と現若草山の三笠山と二つの三笠山が存在することになったが、陸地測量部の地図は、「嫩草山（三笠山）」「御蓋山（春日山）」と表記した。奈良県では若草山の称を採用し、公文書には嫩草山の字をあてたが、観光がさかんになるにつれ、三重の山容に親しみをこめて三笠山と呼ばれることが多くなった。やがて公文書にも三笠山と記されるようになり、若草山の芝生保護のため昭和六年（二五三）に組織された保勝会も三笠山の名を採って三笠山保勝会と称した。昭和十年当時、いまの若草山を三笠山といっても、疑問をさしはさむ人は誰もいなかったのである。

昭和七年（二五三）十二月、奈良市は機構を改めて産業観光課を新設するが、翌八年九月観光課は、

『大和宣揚』運動の前衛」として、全国中小学校長宛つぎのような「宣言文」頒布した（『奈良市

五号十一）。

記

我が大和ハ人モ知ルゴトク神武天皇橿原ニ皇基ヲ確立ナシ給フテヨリ此ノ方実ニ二千五百年ノ永キニ亘ツテ列聖ノ都居ン給フトコロトナリ、（中略）誠ニ当代稀ニ見ル聖地ト称スルモ過言デハナイ、殊ニ奈良市ハ是等聖域ノ中心地デアツテ天平ノ遺品、穏和ノ氣候、敦朴ノ人情、更ニ端麗極リナキ風景美ノ存スルアリ、蓋シ絶好ノ修学旅行地ト云ヒ得ヘク現下非常ノ時國本復原ノ聲かしましク叫バレル折柄、国体再認識ノ前提乃至ハ実物教材トシテノ奈良観光コソ第二ノ国民ヲ養成スル教育者ノ務メテ

選ブベキコースデアラネバナラヌ。然ルニ近時ノ修学旅行ハ二三時間ノ短時巡覽ヲ以テ能事^シレリトナ大シ都市ノ外貌ニ憧レテカカル深處ニ留意セヌノハ単ナル認識不足ト云フヨリモ寧ロ迷惑至極ノ迷蒙ト断セザルヲ得ナイ、庶クバ今後共奈良へ来訪サレル際ハ是非共古都ニ一泊サレ、歴史的、地文的、情操的教育ノ欲求ヲ充足シ、堅実ナ民族自決思想ヲ把持シタ国民ノ養成ニ努力セラレタキモノデアル、

すでにこの時期、奈良への観光を大和聖蹟顕彰運動の一環ととらえ、国体認識のための教化の手段とみるようになって注目される。

これにつづいて「市観光課デハ、今秋ヨリノ宣伝資料トシテグラビア二度刷ノスマートナリーフレットト、小唄ノ美麗ナ葉はぎ一種作成発行スルコトニ」なり、今後は経費のかかるわりに効果の少ないポスターなどはやめて、「多種多様、パンフレット宣伝ニ進ム意向」であるとしている（同掲）。

ついで奈良市は、九年四月に観光課を独立させ、観光行政に積極的に取り組む姿勢を示した。観光課は観光客誘致のための宣伝に力を入れ、日本観光地連合会・ジャパンツーリストビューローなどの全国的組織と結んで各観光地と連係をとるとともに、市内の奈良観光協会・奈良遊覧施設後援会・春日奉讃会・聖武天皇奉讃会・旅館料理業組合のほか大和観光地連合会などの相互連絡の中心となって活動した。

昭和十年八月十一日には、興福寺寺務所前で公園納涼大会を開いて吹奏楽の演奏やトーキー映画の上映を行い、翌十一年六月には、第四小学校（現奈良小学校）を会場に大阪中央放送局と共催で観光奈良の紹介宣伝を目的とする「奈良の夕」を開催したが、これには約一五〇〇人が集まり、その状況は全国に中継放送された。またこの年には、市内小学校地歴担当教員の執筆になる『名勝案内記』をつくったが、これは普通の案内記と異なり、古都の歴史的価値を掘り下げたものだったという。翌十二年には、県と共催で観光祭を開くとともに、観光宣伝のため奈良の風景や

行事を映画にしたり、奈良の未来像を描いた鳥瞰図を作成したりしている。

この間奈良を訪れる観光客は増加をつづけ、昭和十一年の観光客は前年より一八万八八四〇人増の五二八万七五三四人、内宿泊客は六万五二七六八人の三二万七九〇六八人、外国人は二二一人増の五七五〇人、『奈良新聞』は「どんなもんぢやい／＼世界的」の鼻高々と「観光奈良の繁昌」を謳歌している（昭和十一年）。しかし、十二年七月からの日中戦争の全面化は大きな打撃となった。そのため観光課は、十四年三月「事変の打撃を一挙挽回」するため「遊客誘致」に乗り出し、「観光春の陣に駒を進めへ皇軍の武運長久祈願は先ず奈良へ」の旗幟も高く、近く本格的宣伝を開始、全国中小学校に宣伝印刷物をバラ撒く外、近くポスター三千枚、名所案内記七千部、案内鳥瞰図二万枚、一枚図案内略図一五万枚、絵葉書などの用意を整へ、京阪神方面を主として遊客の誘致に全力を注ぐ事」になったという（『奈良新聞』昭和十四年三月十五日付）。

他方、県の観光行政は、大正十年（一九二一）以来公園課の担当になっていて、観光課の設置は市よりも遅れた。昭和九年（一九三四）になって県は、観光協会や保勝会のほか、旅館・名産店など約三〇の県下の観光団体を組織して、大和観光地聯合会を結成させるが、十一年七月、同聯合会は加入団体をふやして奈良県観光聯合会と改称、紀元二千六百年にあたる昭和十五年（一九四〇）には建国の聖地大和への観光客の増大が予想されるとして、観光課の設置を県に要望した。これに応じて県当局は、翌十二年一月、公園課から観光課を独立させ、聖地大和の宣伝と観光客の誘致および諸施設の整備を担当させることにした。

聖地顯彰　すでに述べたように市の産業観光課は、昭和八年（一九三三）九月「大和宣揚運動の前衛」として全
の観光へ　国の中小学校長宛「宣言文」を出して、修学旅行の奈良来訪を呼びかけたが、十一年七月につく

られた奈良県観光聯合会の会則の第一条にも「本会ハ建国大和史蹟ヲ宣揚シ、以テ国民精神作興ニ資シ、併テ県下

觀光地ノ宣伝及觀光施設ノ連絡統制ヲ計ルヲ以テ目的トス」とあつた。この年一戸知事は、置県五十年の記念に県政運営の基礎を樹立するため県政調査を実施するが、これを輯録した十二年の『奈良県政調査』の第十一章觀光にも、奈良県における觀光の特異性として「本県ハ建元発祥ノ聖地ニシテ、幾多ノ貴重ナル史蹟ニ富ミ古文化ノ粹ヲ包蔵シ、其ノ觀光ハ国体ノ精華ト大日本文化ノ淵源トヲ理解スル上ニ於テ極メテ重要ナル意義ヲ有ス」とある。県はまた、昭和十年には大阪市で、十一年には東京市で、十二年には東京・横浜両市で、各学校教育関係者を集めて修学旅行の勧誘をしているが、これまた「建元発祥ノ聖地ヲ宣揚シ、併セテ県下各地ニ多数存在セル史蹟ヲ顕彰セシムル」の「大和宣揚」とし企画されたものであつた（『奈良県政調査』）。

昭和十二年からの日中戦争の全面化は、こうした傾向に拍車をかけることになつた。『大阪朝日新聞』は、「遊覽的部分を排しノ聖蹟と皇陵、神社の巡拝ノ觀光大和宣伝の戦時体制」の見出しで、県觀光課が「在来の觀光宣伝中享樂と遊覽的な部分を一擲して、大和觀光の特異性たる建国肇業の聖蹟と皇陵、神社の巡拝による皇軍健勝の祈願と心身の鍛鍊を強調し、もつて敬神崇祖の觀念の涵養に資することに決定、三十日県下各觀光会長、觀光地町村長に右の主旨に本づく觀光事業の振作を促す通牒を發した」と報じている（昭和十二年八月三十一日付）。これを受けて県・市とも「皇陵巡拝コース」の案内書や「皇軍武運長久祈願は聖地大和へ！」の図入パンフレットを作成、京阪神方面への宣伝を開始した（『大阪朝日新聞』昭和十二年九月二十九日付）。その後奈良市では、皇陵巡拝ハイキングの宣伝に努めるが、十三年九月には「觀光秋の奈良」をつくつて皇陵巡拝コースなど七コースを選定して觀光客の誘致をはかたりしている。昭和十五年（一九四〇）の紀元二千六百年が近づくと、大軌（現近畿）もまた、伊勢神宮・橿原神宮・桃山御陵を結ぶ線を国体明徴線と名づけ、これに奈良公園も加えて旅客の誘致に努める。

このように奈良大和への觀光は、軍国主義の高まる中、聖地・聖蹟の巡拝が中心になり、觀光のレジャー的側面

は急速に失われて著しく精神主義的・国粹主義的性格を強めていったのである。そして、十三年四月、市の観光協会が観光報国の事業として奈良公園の清掃や神社仏閣参拝デーを決定、ついで観光報国週間に春日神社参拝や若草山の美化清掃に市内各小学校児童を動員するなど、観光もまた戦時色を強めていった。

紀元二千六百年の奉祝行事は、畝傍町(現櫻)を中心にするめられたので、奈良市では奈良公園に桜の記念植樹を行ったり、春日神社をはじめ諸大寺の環境整備が行われた程度であった。実は昭和十一年ごろ、市の記念

事業として万国博の開催・歴史館の建設・御陵参拝道路の整備・平城宮址の運動場化公園化などの案があったが、総くずれになったという(『奈良新聞』昭和十一年九月二十九日付)。二千六百年にあたる昭和十五年四月、観光奈良にとつての大きな出来

事として、「寺院等ニ無償ニテ貸付シアル国有財産ノ処分ニ関スル法律」の施行によって、奈良公園内の東大寺と興福寺の旧境内地が、無償で両寺に払下げになったことであった(払下げられた境内地には、公園としての地上権が設定されたので、奈良公園はそのまま維持された。ただし、この地上権は太平洋戦争後反故と)。ついでながらこの年の観光客は未曾有の数に達し、県内で三八二八万人、その内奈良へは約八〇〇万人余り、

その内訳は表32のとおりであった。またこの年、大和観光自動車会社(本社は中筋町)が設立され、翌十六年正月から大型バス一五台で営業を開始するが、その運行コースとして奈良めぐりと大和めぐりがあった。奈良めぐりは興福寺から始まり、浅茅ヶ原・物産館・春日大社・若草山・手向山八幡宮・東大寺を経て、法華寺・平城宮跡・西ノ京とまわるコースで、所要時間は三時間、料金は一人一円二〇銭であった。

こうした中、「観光報国」など観光の二字は盛んに用いられたが、太平洋戦争が始まるに及んで観光は急に肩身

表32 昭和15年度 観光客数

		団体・個人別	人 数
日 掃 客	個 人		3,895,447
	一 般 団 体		1,942,037
	学 生 ・ 生 徒 団 体		1,624,502
	計		7,461,986
宿 泊 客	個 人		224,897
	一 般 団 体		197,801
	学 生 ・ 生 徒 団 体		304,509
	計		727,207
総	計		8,189,193

県統計課発表による。

が狭くなってきた。昭和十七年（一九四二）、県では公園課と観光課を統合するとともに総務部に聖地顕揚課を置き、市もまた同年観光課を廃して厚生課観光係に格下げし、十九年には文化課観光係に縮小する。なお、戦後県では聖地顕揚課を文化課に改め、市では観光勸業課を置く。

